

＜ワークショップ報告＞

①協同実践力の育成をめざした初年次からの教育指導—LTD 授業モデルを中心に—

担当者： 安永 悟 (久留米大学)

概要： 主体的・対話的で深い学びを実践できるアクティブラーナーを育てるには、質の高いアクティブラーニング型授業が求められる。本ワークショップでは協同教育の理論と技法を基盤とする LTD (Learning Through Discussion) 授業モデルに沿った授業づくりを理解し、質の高いアクティブラーニング型授業の実現に向けた授業づくりの基本的な考え方と実践方法を、参加者全員で吟味した。その際、アクティブラーナーに求められる一連のコンピテンシーを「協同実践力」として仮定し、その育成をめざした初年次からの教育指導のあり方を手がかりとして議論を深めた。

具体的には、協同実践力と LTD 授業モデルを説明した後、LTD 授業モデルに沿った授業づくりを紹介した。実践例として、医学生や看護学生や心理学生を対象とした初年次教育科目や専門科目への適応例を取り上げた。そこには Web による遠隔授業も含まれていた。

体験的理解を重視する本ワークショップでは、3・4人グループを中心に活動し、協同の考え方(協同の精神)や基本的な技法(傾聴・ミラーリング、ラウンドロビン)など、協同学習の基礎基本、および LTD 話し合い学習法の概要を理解した。

参加者全員、グループワークに積極的に参加し、仲間との対話を通して理解を深めていた。ワークショップ終了後、ほとんどの参加者が会場内に留まり、個別に、または小集団になって交流を深めていた。

キーワード： 協同学習, LTD 授業モデル, LTD 話し合い学習法, 協同実践力, Web 授業

② 2030 年の初年次教育を構想する～初年次教育の再定義を通じて

担当者： 成田秀夫 (大正大学), 山本啓一 (北陸大学), 吉村充功 (日本文理大学), 菊地滋夫 (明星大学), 垣花 渉 (石川県立看護大学)

概要： 現在の大学教育においてはアフター・コロナを見すえつつ、Society5.0 時代に向けた転換が迫られている。その影響は初年次教育にも及んでおり、令和 2 年 1 月 22 日に公表された「教学マネジメント指針」を踏まえると、今後の初年次教育は大学のカリキュラム全体と有機的に連動して再構築することが求められている。昨年度のワークショップにおいて明らかになったのは、本学会が設立された 2008 年から現在の初年次教育が大きく変貌を遂げたことである。初年次教育が学士課程教育全体から見て位置づけられる一方で、高大接続も進み、初年次教育のアップデートが求められている。さらには、2030 年を見すえると DX 推進等の多くの課題も明らかになった。本年度は、

オープンスペーステクノロジーの方式を用いて、企画者が設定した4つのテーマと参加者から提起された2つのテーマに分かれてディスカッションを行った。企画者が提起した4つのテーマでは、①「2008年の初年次教育」では学会設立当初の課題を振り返り、②「初年次教育の現在地」ではコロナ禍を踏まえた初年次教育の現状を確認し、③「2030年の初年次教育」ではSociety 5.0を展望した初年次教育のあるべき姿を構想し、④「初年次教育の通時的変化」では初年次教育の来し方行く末を俯瞰した。参加者から提起された「初年次教育とキャリア教育」ではキャリア教育を初年次から始めることの重要性が議論され、「質問力向上の教育」では質問の質をいかに評価するかが議論された。

今回のWSでは、初年次教育の来し方・行く末を概観することができた。次回以降、これからの初年次教育を展望できるよう議論を深めていきたい。

キーワード： 共通教育と専門教育、教学マネジメント、アフター・コロナ、自律的学修者、高大接続

③入学前教育をデザインする—ライフキャリア型初年次教育との接続の観点から—

担当者： 森 朋子(桐蔭横浜大学)、溝口 侑(桐蔭横浜大学)、常浦光希(環太平洋大学)、岡田航平(京都大学)

概要： 本ワークショップでは、初年次教育に接続する入学前教育の役割とその成果について検討を行い、入学時教育の今後の発展の可能性について参加者全員で議論を行った。具体的には、前半では入学前教育の歴史的背景やその役割について理論的に整理し、岡田会員より報告を行った。その中で、大学の学びへの動機づけに効果があるとされているライフキャリア型初年次教育へ接続するプログラムに焦点を絞り、桐蔭横浜大学から溝口会員が、環太平洋大学からは常浦会員がそれぞれ所属の大学の事例を報告した。後半、まずは参加者の所属大学で行われている入学前教育についてグループワークにて共有を行い、そのメリットや課題について共有を行った。その中で、入学前教育単体ではなく、初年次教育への接続するプログラムとして得られる効果をテーマに、登壇者がファシリテートを務める形で、参加者グループ内で議論を行った。そしてさらにいろいろな諸条件はまずは置いておいて、理想の入学前教育プログラムを作るとしたら、というお題でそれぞれが考えたものをグループで共有し、発表を行った。その中には、学生への動機づけ、保護者の巻き込み、仲間づくりなどがキーワードとして挙げた。

キーワード： 入学前教育、ライフキャリア型、初年次教育との接続

④演劇的手法とコミュニケーションデザインによる初年次教育の授業設計

担当者： 蓮 行 (京都大学)

概要： 本ワークショップは、演劇的手法を用いた授業設計を体験的に理解してもらうことを目指して開催した。担当者が大学で実施している演劇ワークショップを、コミュニケーションデザインの解説を交えて体験してもらい、その後意見交換を行った。まず、導入のコミュニケーションゲームとして「歩く&止まるゲーム」を実施した。このゲームでは、ファシリテーターの拍手の合図に合わせて、歩く→止まる→歩く…を繰り返す。拍手の回数が複数回だった場合は、その回数分の人数で近くの人とチームを組んでもらう。ただし、一度同じチームになった人ともう一度同じチームになることはできない。歩く→止まる→歩く…を複数回繰り返すことで、自然に、ランダムイズされたグループを複数つくることができる。メインワークとしては「件の宣言」を実施した。このワークは、直接民主制の体験を目的に開発されたものであり、ある論題のもとで4つのチームに分かれて、主張の演説、ディスカッション、無記名投票というプロセスを体験する。今回は、「日本の一夫一妻制を維持すべし/緩和すべし」とのテーマで、「過激な維持派」「穏健な維持派」「穏健な緩和派」「過激な緩和派」に分かれて議論してもらった。ワークショップ後の討論で、参加者からは、演劇ワークショップの方法について「自分の中に色々な人格があっても良いということを、ポジティブに提示しているように思う(就活等の機会に悩む学生が多い)」等の意見が出た。

キーワード： 演劇的手法, ロールプレイ, 表現活動, アクティブ・ラーニング, コミュニケーションデザイン

⑤初年次教育×オンライン×キャンパス

担当者： 田中 岳 (岡山大学), 立石慎治 (筑波大学), 宮浦 崇 (九州工業大学), 大嶋康裕 (崇城大学) *ICT 技術協力

概要： 大学等の様相を一変させたコロナ禍の影響が静まらないまま、新しい様式の模索をスタートさせていることが窺える。コロナ禍での生活スタイルに関する理解が進んだといえるのかもしれない。授業、入試、正課外活動など、地域による差はあったものの、オンラインを中心としたリモート化や、延期、代替措置など2020年以降の緊急避難的な措置が、いつの間にか新たな習慣となってしまう、コロナ禍以前の風景に戻すことの対応に苦慮する大学等の状況も見受けられるようになってきた。これまでにない高等教育へと前向きな変化が進んだのはコロナ禍の困難による、という見方も当初あったが、実際にはどうだっただろうか。本ワークショップは、これまでを振り返り、それらを踏まえて、これからの初年次教育について参加者と検討を深めることを目的とした。「2年程度のハビトゥスがコロナ禍以前を忘れさせている」「前向きな変化といっても、実は質向上の検討が薄い」「否、DX はじめ進歩的な

未来へと進む」といった紋切り型でもなく、この時期だからこそ考えられる初年次教育の先行きについて知恵を出し合うことに力点が置かれた。当日は、デボノ博士の6色ハット発想法を用いて思考を拡大する対話を教室内で対面により展開した。その検討内容の全体共有は、参加者各自がPCを持ち込むことでオンライン上へ移行し(『IdeaBoardz』というツール活用)、非接触型のワークショップを試みた。なお、プログラムの冒頭には、次のような目標、役割、過程を提示し、構造的なグループワークを進めた。

[目標] ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、それぞれ課題解決への道筋を自身の言葉で語ることができるようになる。[役割] 担当者は参加者間の相互作用を活性化する進行に努めますので、御参加の皆さんには主体的な活動をお願いいたします。[過程] ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に参加者全員での共有までを計画しています。

キーワード : コロナ禍, オンライン, キャンパス, ハビトウス, DX

⑥モデル授業公開検討会(1): 初回イントロダクション

担当者 : 藤田哲也(法政大学), 井上晴菜(法政大学)

概要 : 本ワークショップでは、担当者(藤田)が実際に法政大学で行っている初年次教育科目である「基礎ゼミ」に基づき、もう一人の担当者(井上)が実際に模擬授業を行い、授業後に参加者と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換をした。各参加者が、自分自身の授業計画を見直したり、授業の進め方について工夫するための観点を豊富にすることが、本ワークショップの目的であった。今回は、ワークショップの前半の時間を使って、年度初めの第一回目の授業を想定した「イントロダクション」を行った。後半では、どのようにすれば受講生に対して初年次教育科目の教育目標を適切に伝えることができ、授業に参加することの重要性を実感してもらえるかについて、理論と実践の双方から議論を行った。12名の参加者には、前半は受講生の視点を持って、ペアワークなどのアクティビティに動的・積極的に参加していただいた。後半の授業検討会においては、授業をよりよくするための複数の論点ごとに活発な議論を行った。

キーワード : 初年次教育モデル授業, 授業検討会, 気づき, シラバス